

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350936

研究課題名(和文) 保育所における生活困難の早期発見・早期対応と保育所の組織運営に関する研究

研究課題名(英文) The relationship between the early supports for life tasks and the management of organizations in the day care centers

研究代表者

中谷 奈津子 (Nakatani, Natsuko)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：00440644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：保育所等における生活困難の早期発見・早期対応と、保育所内外の組織運営のあり方を明らかにした。予備調査から、保護者支援に関する園内の役割項目の抽出と、生活困難の早期発見のための観点整理を行った。大阪府下私立保育所・認定こども園を対象とした質問紙調査を実施し、保護者支援に関する役割項目の重視度及び実施度、早期発見の観点に加え、施設長のリーダーシップ、組織内風土、支援に対する考え方、支援の評価、研修の受講の有無などをたずねた。保育所等では、生活困難を抱える保護者支援について、園内で役割分担を行いつつ組織的対応を行っていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study was aimed to examine the relationship between early supports for life tasks and the management of organizations in the day care centers. Through the analysis of the preliminary research, we extracted the viewpoints for early detection of the families who faced life tasks and the various roles of supports for parents in the centers. Then we carried out the mail-back survey of the private day care centers in Osaka. The main questions of the survey were about the viewpoints for early detection, the roles of supports for parents, the leadership of the directors, organization culture, teachers' ways of thinking about supports, evaluation, and so on. As a result, in the day care centers, the directors and the nursery teachers and other employees seemed to divide the roles according to the levels of the positions inside the organization to support the parents.

研究分野：保育学

キーワード：保育所 生活困難 早期発見 早期対応 保護者支援 組織的対応

1. 研究開始当初の背景

保育所は、子どもと保護者が日々通い、保育者とコミュニケーションを交わすところであり、信頼関係に基づいた日常の観察、声かけ、寄り添い、見守りが可能な社会資源でもある。保育所においては、子どもや家庭のわずかな変化に気づき、問題が深刻化する前段階で、家庭での生活困難を早期に発見することが可能になると思われる。

保育所における生活困難の早期発見については、これまで、児童虐待を中心に議論されてきた(望月他 2011、松井 2000、加藤 2010)。しかし子どもの生活を脅かすものは、何も児童虐待に限ったものではない。また、児童虐待が単一の要因から起こるものではなく、複合的要因によるものであることを考えると、単なる育児相談ではない、より広範囲の生活困難を見定めた対応が今後、強く求められていくと思われる。

生活困難は、日々のちょっとした生活の変化として現れると推察される。しかし、保育士がどのようなインシデントを生活困難の SOS としてキャッチし、早期発見・早期対応につなげていけばよいのかについては、まだ十分に議論されていない(望月他 2011)。また各論考や保育士養成テキストにおける保護者支援の配慮事項や援助方法は、保育士側から論じられたものが多く、実際の保護者対応の場面において、保護者が、生活困難の SOS を出しやすい保育士との関わり、組織運営とはどのようなものか、保育士は、子どもや保護者から発せられたどのような変化を SOS として読み取り、その後の早期発見・早期対応につなげていくのか、それらは保育所の組織運営のあり方と関連するの否かについては、未だ検討されていない。特に、保育士側の母性意識や親役割への期待が高ければ、生活困難を抱える保護者は、さらに問題を抱え込み、SOS を発する機会を逸してしまうものと思われる。保護者からみた、生活困難の SOS を出しやすい保育士との日常の関係性、コミュニケーション、保育所内外の組織運営のあり方を検討することが求められている。このことは、保育所における生活困難の早期発見、早期対応のための重要な視点となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保育所における生活困難の早期発見・早期対応と、保育所内外の組織運営のあり方の関連を明らかにすることであった。ここでいう生活困難とは、子どものしつけや育児不安、児童虐待に関するだけでなく、経済的困難、介護、障害、不登校、ひきこもり、夫婦関係、DV など、家庭内で起こり得る様々な困難を指す。保護者が生活困難の SOS を出しやすい保育士との関わり、組織運営のあり方とは何かを、保護者及び保育士双方の視点から検討した。生活困難の早期発見・早期対応と保育所内外の組織運営の

あり方との関連、保育所内外の組織の疎通性を規定する要因の検討を行い、生活困難が深刻化する前に、生活困難を早期に発見し、早期に対応していく新たな保育所の社会的役割を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

文献調査、インタビュー調査、アンケート調査を実施した。

インタビュー調査は、2013年11～12月に、大阪府内または兵庫県内在住の保育所を利用する年中または年長児の保護者を対象として行った。

アンケート調査は、大阪府社会福祉協議会の協力を得て、郵送法により、大阪府下の私立保育所及び認定こども園を対象に、予備調査及び本調査を行った。

予備調査の調査票は、「園長」票、「主任」票、「スマイルサポーター」票、「クラス担任」票、「フリーの保育士」票の5種類あり、各保育園それぞれ5名に回答を求めるものとした。回答された調査票は各自封筒に入れ封をした状態で保育園ごとにまとめて返送するよう依頼した。配布は24園120票、回収は21園96票、回収率は80.0%であった。

本調査の調査票は、「園長」票、「主任」票、「担任」票、「地域担当」票、「非常勤」票の5種類あり、各園におけるそれぞれの5名に回答を求めるものとした。回答された調査票は各自封筒に入れ封をした状態で保育園ごとにまとめる方法と、個人で返送する方法の両方が可能になるようにした。配布は3,245票(649か所×5部)、回収は1,271票、回収率は39.2%であった。

4. 研究成果

(1) 文献調査

第1に、保育所における保護者支援の課題を明確にすることを目的に、保育ソーシャルワーク研究を概観した。その結果、相談援助機能、連携機能、交流支援・組織化機能が多く言及されていることがわかった。また組織的対応に言及したものもみられたが、より具体的で、効果的なあり方を検討することが課題と思われた。子育て以外の生活課題については、具体的に言及する研究は少なく、日々の子どもや保護者の姿から生活課題やニーズを捉える視点や技術が求められるものと思われた。

第2に、保育所が担う保護者支援の特性と組織的対応の実態を明らかにすることを目的に、保育現場で行われている保護者支援の具体的な取り組みを文献研究から読み取り整理した。対応した問題や課題については、子育てに関するものよりも子育て以外の生活課題が多く抽出された。保育所の保護者対応ではすでに子育て以外の多様な生活課題に取り組みざるを得ない現状があるものと考えられた。

(2) インタビュー調査

保育所を利用する保護者がどのような条件であれば保育士に相談するのか、保護者が生活困難を抱えるときの、保育士に対する相談しやすさと、育児困難を抱えるときの相談しやすさは同じ質のものか確認することを目的に、半構造化インタビューを実施した。

調査項目は、これまで保育士に子育てに関する相談したことがあるか、相談した/しない理由、相談する条件、子育て以外の生活の悩みを保育士に相談したことがあるか、相談した/しない理由、条件する条件、である。

結果及び考察として、第1に、保護者は、保育士の「日常的な保護者へのアプローチ」を通して保育士や保育所に信頼を寄せることが明らかになった。またそれと同時に「信頼される保育所運営」や「地域との交流」を目の当たりにすることも保育士や保育所に対する信頼を深めることもわかった。

第2に、その信頼が前提にあり、子育ての悩みを抱える際に「保育士としての行動特性」によって保護者は相談しやすい雰囲気を感じ取り、そして保育士の「敷居の低い相談対応」によって話すことが触発されることがうかがえた。同時に「相談場所であることの周知」が相談する誘因となっているとも考えられた。

第3に、実際に相談が始まれば保育士が「対人援助技術の活用」によって保護者に接し、「相談内容に応じた具体的対応」をとり、保護者の抱える課題が軽減されるものと思われた。

第4に、その結果、保護者は対応に満足し、さらに保育士（保育所）への信頼が高まり、これらを基盤に、再び相談しようと考えたり、子育て以外の相談をしたりするようになることがうかがえた。

第5に、子育て以外の相談は特に「敷居の低い相談対応」「相談場所であることの周知」が重要な誘因となっているものと思われた。

(3) 予備調査

組織内の役割分担の検討

保育所が生活困難に対して適切に対応していくためには、保育士個人の判断や単独の行動だけでは限界があり、保育所が組織やチームとして、保護者の生活安定を視野に入れ、子どもの最善の利益を追求していくことが求められる。そのためには組織全体による生活困難の早期発見と早期対応、及びニーズに応じた他機関との連携が必要となる。

そこで、保護者の生活困難を早期に発見し、早期に対応するための園内における役割分担を明らかにすることを目的に、大阪府下私立保育園における園長、主任、担任、スマイルサポーター、フリー保育士を対象に、アンケート調査を行った。

調査項目として、各家庭の生活困難（家庭

の維持・継続を難しくするような困難）に対応するために、園内でどのような役割分担が必要かについて、職位を示した上で自由記述を求めた。

職位ごとに必要と考えられた具体的役割についての記述データを、意味のまとまりごとに分割し、通し番号を付して記録単位とした。それらを分類するにあたり、保育相談支援の展開過程を参考に（柏女・橋本 2011）、

支援の前提、支援の開始、情報収集・交換、事前評価、支援計画の作成、支援の実施、経過観察、事後評価、終結、

職員間の連携、の分類軸を設定した。内容分析の手法により10項目に分類された役割項目を、「行為」の類似性に基づき、各項目内で集約し、類型ごとに表札を付した。表札の抽象度が同程度の水準となるまで項目の用語を精査し、具体的な役割項目を作成した。

園長の役割として多く抽出されたのは、関係機関との連携、関係機関への連絡・調整、次いで保護者との面談、関係機関との仲介等であった。

主任の役割では、報告をするが最も多く、保護者からの相談を受ける、報告を受ける、保護者との面談が多くみられた。

スマイルサポーターの役割では、保護者からの相談を受ける、保護者の話を聞く、対応策の検討、報告をするが示された。

担任の役割では、報告をする、日常的な子どもの観察、保護者の変化の読み取り、子どもの変化の読み取り等となった。

フリーの役割では、報告をする、子どもの保育を通じての支援が多くみられた。

以上のことから、保育所における保護者の生活困難への対応については、組織的、構造的な支援が必要とされていると思われた。

生活困難の早期発見の着眼点の抽出

また、保育士が何を根拠として生活困難を抱える子どもや家庭と判断しているのかを明らかにするために、「子どもや家庭のどのような様子から、その家庭の生活困難を発見できると思うか」について、子どもの様子、保護者の様子、その他の3つの視点から、自由記述による回答を求めた。

子どもの様子については、不衛生である、食行動が変化（過剰な食欲など）する、攻撃的な行動が増える、感情の起伏が激しくなる、不自然なケガが増える、意欲が低下するなどの11項目が抽出された。

保護者の様子については、身だしなみが変化（化粧の有無、華美）する、保育者との関係が不良（理不尽な苦情、関係の回避など）である、必要経費の滞納が続く、送迎時の様子の変化（時間、送迎者など）する、

身体の不調が見られる、精神的な不調が見られるなどの14項目が抽出された。

児童虐待研究と比較すると、子どもの様子に関してはほぼ共通しており、上位2項目はネグレクト状態の子どもの様子と一致して

いた。違いとしては、性的虐待の子どもの様子を示すものが抽出されなかった点である。保護者の様子に関してもほぼ共通していたが、最頻出項目（身だしなみの変化）が児童虐待研究では言及されていなかった。

（４）本調査

既述してきたように、これまで、各家庭の生活課題（家庭の維持・継続を難しくするような困難）に対応するための園内の役割項目を抽出してきた。しかし少ない標本数とあいまいな設問により、その結果が実態に即しているのかは定かではないという課題が残った。さらにそれらの役割遂行が本当に保護者支援に対して有効かについても検証していく必要があると思われる。よって本調査では、これら役割項目の実施状況、重要度の認識についての現状を明らかにすることを目的とした。さらに職階ごとに重要と考える役割、実施する役割に違いがあるのか、またそれらと保護者支援における評価との間に関連はあるのかについて検討した。

本調査における調査項目のうち、属性、園の概要（園長のみへの質問）、役割項目（99項目 79項目に修正したもの）の重視度と実施度（5段階評価）、生活困難を抱える保護者支援への評価（4段階評価）について取り上げる。

役割項目の実施状況と重視度の平均値を算出した。どの項目においても重視度が実施状況を上回る結果となった。実施状況と重視度で平均値の高い項目は、子どもの観察や把握、保護者への声かけ・挨拶や会話、保育を通した子どもへの支援であった。平均値の低い項目は、保護者支援の目標の設定、連携先の検討、支援計画の策定、役割分担の調整、支援への評価・改善に関するものであった。

重視度に関する役割項目について因子分析を用いて情報を集約した（最小二乗法、プロマックス回転）。その結果、固有値 1.0 以上の因子が 10 抽出された。それぞれの因子名を「日常的な観察」「保護者との関係構築」「相談体制の整備と相談受理」「意図的な情報収集」「情報の集約・整理と共有」「事前評価と支援計画」「具体的な保護者支援の展開」「子どもの保育を通しての支援」「評価改善」「経過観察・見守り」と命名した。

各因子の項目平均を下位尺度得点とし、これを従属変数、非常勤を除く職階を独立変数として一元配置の分散分析を行った。その結果、園長は「相談体制の整備と受理」「情報の集約と支援計画」「事前評価と支援計画」の得点が高く、主任は「日常的な観察」「保護者との関係構築」「相談体制の整備と相談受理」「意図的な情報収集」等で、担任は「保護者との関係構築」「意図的な情報収集」で得点が高いことが明らかになった。

重視度と同様に、実施状況の因子別得点を従属変数、職階を独立変数として一元配置の分散分析を行った。どの項目においても、職

階間で実施する役割項目が異なることが示された。園長は、「相談体制の整備と相談受理」「情報の集約・整理と共有」「事前評価と支援計画」等において実施する得点が高く、主任は、「日常的な観察」「意図的な情報収集」「経過観察・見守り」を行う傾向にあった。また担任は「日常的な観察」「保護者との関係構築」「意図的な情報収集」「子どもの保育を通しての支援」を行う傾向にあった。地域、非常勤については、特に高い得点は得られなかった。

園内でそれぞれの職階による役割分担がなされており、それらは有機的に機能しているものと思われた。

また保護者支援の評価については、園長や主任が非常に多くの役割を担っている方が、「うまくいっている」と評価する傾向にあった。保護者支援を有効なものにするためには、管理的な立場にあるものが、どの領域にもわたって保護者支援に関わっていくことが必要であると思われた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

鶴宏史・中谷奈津子・関川芳孝「保育所における生活課題を抱える保護者への支援の課題 - 保育ソーシャルワーク研究の文献レビューを通して - 」教育学研究論集 (11)、2016、査読有、1-8
<http://libir.mukogawa-u.ac.jp/dspace/handle/10471/1175>

中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝「保育所における生活課題を抱える保護者への支援：保護者支援・保護者対応に関する文献調査から」大阪府立大学紀要人文・社会科学 63、2015、査読なし、35-45
<http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/handle/10466/14405>

〔学会発表〕(計6件)

中谷奈津子「保育所における生活課題を抱える保護者への支援（6）」日本保育学会第69回大会、2016.5.8、東京学芸大学（東京都小金井市）

鶴宏史「保育所における生活課題を抱える保護者への支援（5）」日本保育学会第69回大会、2016.5.8、東京学芸大学（東京都小金井市）

中谷奈津子「保育所における生活課題を抱える保護者への支援（4）」日本保育学会第68回大会、2015.5.9、椋山女学園大学（愛知県名古屋市中区）

鶴宏史「保育所における生活課題を抱える

保護者への支援(3)」日本保育学会第68回大会、2015.5.9、椙山女学園大学(愛知県名古屋市)

中谷奈津子「保育所における生活課題を抱える保護者への支援(2)」日本保育学会第67回大会、2014.5.17、大阪総合保育大学(大阪府大阪市)

鶴宏史「保育所における生活課題を抱える保護者への支援(1)」日本保育学会第67回大会、2014.5.17、大阪総合保育大学(大阪府大阪市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中谷 奈津子 (NAKATANI, Natsuko)
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号: 00440644

(2) 研究分担者

関川 芳孝 (SEKIKAWA, Yoshitaka)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号: 10206625

鶴 宏史 (TSURU, Hirofumi)
武庫川女子大学・文学部・准教授
研究者番号: 80411932